

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

東京五輪、日本人のメダル獲得で盛り上がった。1998オリンピック冬季競技大会白馬会場を思い出す。当時、競技が開始さ

れてから4日間は日本人の活躍が無く、白馬スノードーム施設内の特別ブースは閑散した状況。担当者から「ジャンプ競技での日本人の活躍がなければ大量に用意したグッズが売れ残るので長野に商品を移動する」と話があった。

陳列された

グッズは、オリンピック競技のオリジナルピンバッジや白馬をデザインしたオリンピックデザインのTシャツなど貴重なものばかりだった。所有していたお金で、買えるだけ購入するが悔しさが募る

五輪開催とコロナ感染拡大は今後の行事運営に課題を残した

に完売状況。数量限定の商品が多かったの

人たちの霊をまつる行事やその期間の事を意味しているが、そもそもお盆がどのようなのか、意味や由来をよく知らずに過ごしている事が多い。

「お盆」という言葉は、「盂蘭盆会」という

の十大弟子で「神通第一」

て反省会をするから、その人たちに「馳走をして、心から供養しなさい」と。そのとおりになると、母親は餓鬼の苦しみから救われたというエピソードから月遅れのお盆と、終戦の日が重なったのは歴史の偶然だが、平和国家の構築には幸いだったにちがいない。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)

思いは、今でも鮮明に思い出す。しかしジャンプ競技がスタートしてノーマルヒルで船木和喜選手が銀メダルを取ると、状況が激変。観戦後に大勢の観衆が特別ブースに殺到して、瞬く間

盛り上げは無かったのだろう。大会の盛り上げを企画した関係者の嘆きが聞こえてくる様だ。

言葉から派生した言葉で、言葉自体は古代インド語の「ウランバナ」という言葉に漢字をはめたものだ。ウランバナとは「逆さ吊り」という言葉で盂蘭盆会は「逆さに吊るされたような苦しみを除く」という意味だ。



猛暑の中の運転免許更新。密を防ぐために奮闘する関係者に感謝だ